

今日の箇所のあらすじです。

今、この地一帯はあまりにも恐ろしい飢饉で覆われていました。ヤコブとその一族はエジプトから持ってきた穀物を、すでにみな食べ尽くしていました。そんな時、父ヤコブは再び子供たちに勧めました。エジプトに行く事を・・・。

しかし子供たちにとってエジプトに行くためには、どうしても一つの約束を果たさなければなりません。それはベニヤミンも一緒にエジプトに連れて行くという事です。しかしそれは年老いた父にとっては、正妻ラケルの残したただ独りの息子ベニヤミンだけは何としても失いたくないのでした。

父イスラエル（ヤコブ）は子供たちにつぶやきます。6節「なぜ、おまえたちは自分たちにもう一人の弟がいるとその方に言って、私を苦しめるようなことをしたのか。」「そんな、余計な事をしゃべったのか」それに対して子供たちは弁明します。7節「彼らは言った。『あの方が私たちや家族の事について『おまえたちの父はまだ生きているのか。おまえたちには弟がいるのか』としきりに尋ねるので、問われるままに言ってしまったのです。『おまえたちの弟を連れて来い』と言われるとは、どうして私たちに分かったのでしょうか。』」

こんなやりとりがあった後、とうとう父イスラエルは、子供たちを再びエジプトへ送り出すことになるのでした。

以上が1～15節のあらすじです。

さて、この所を読んでわかる事、それはヤコブの子供たちはエジプトから食物を持って、イスラエルに戻ってから、本当はすぐにでも再びエジプトに行きたかったのです。でも出来ませんでした。父がベニヤミンを失いたくなかったので、父が彼らをエジプトに行かせなかったのです。

42：36節「父ヤコブは言った。『おまえたちは、すでに私に子を失わせた。ヨセフはいなくなり、シメオンもいなくなった。そして今、ベニヤミンまで取ろうとしている。こんなことがみな、私に降りかかってきたのだ。』」ヤコブの気持ちわからないでもないですね。

・（1～10節） それにしてもこの箇所を読みますと、ヤコブが必死にベニヤミンをエジプトに行かせまいとして抵抗しているのがわかります。しかしその様な中でヤコブは次第に、この不気味な出来事の背後に神様の存在を少しづつ感じ始めていました。何か強く自分を、エジプトに引っ張っている力を！・・・。

今ヤコブは「私はベニヤミンを行かせたくない。しかし、神を感じる、神様が私を動かそうとしている、そんな神様の意志を感じる。」という思いに迫られていたのではないのでしょうか。

・（11～14節） 続いてこの箇所でのヤコブと子供たちとのやり取りから、更に彼は少しづつ、神様の導きに対して、自らを委ねて行こうとしています。そして、最後にヤコブは一切を神様にゆだねる決心をするのでした。14節「・・・私も、息子を失う時には失うのだ。」今、聖霊がヤコブの心に働きかけているのでしょうか。

確かに、子供たちの懸命の説得もあったかもしれませんが、しかし、最後の決断はヤコブがすべてを神様にゆだねた時になされたものでした。神様の思いと、ヤコブの思いが、今一つとなって行くのでした。

----- 親子の対話から学ぶ -----

もう1度、ベニヤミンをエジプトに連れて行くことを巡っての親子の対話から学びましょう。

・第1は、（1～5節、読む）ヤコブの子供たちが父のベニヤミンへの愛情に配慮して、エジプト行きを控えていたという告白です。父親の気持ちを大切にしている、子供たちの愛を感じ

ます。

・第2は、(6～10節、読む)レアの子であるユダが、ラケルの子であるベニヤミンを自らを犠牲にしても、何が何でも守ろうとしていることばです。母親が違っても僕たちは兄弟だ！

・第3は、(11～14節)一族のみんなの救いのためには一人のベニヤミンを失うのが御旨ならば失っても良いと言った父のことばです。今、父ヤコブの愛は、すべての子供たちの上に注がれています。

こうしてついに、父イスラエル(ヤコブ)は全能の神を仰いでエジプト行きを決断するのでした。

----- 変わりつつある家庭 -----

それにしても何と、愛と真実に満ちた親子の会話でしょう。みんながお互いを思いやっています。何がこの家族をこんなにまで美しく変えたのでしょうか？考えられることはただ一つ、家族のみんなが自らの罪を認めてへりくだったからです。こんなやさしい心が通い合う家庭を築きたいですね。

----- エジプト行きは神の御旨である -----

さて実は、神様の御旨はヤコブを始め、その子供たちが全員エジプトに下ることでした。

46：3～4節を読みましょう。「すると神は仰せられた。『わたしは神、あなたの父の神である。エジプトに下ることを恐れるな。わたしはそこで、あなたを大いなる国民とする。このわたしが、あなたとともにエジプトに下り、また、このわたしが必ずあなたを再び連れ上る。そしてヨセフが、その手であなたの目を閉じてくれるだろう。』」

でもこのみことばが語られる前に、もうすでにヤコブ一族の中には、主と同じ心が生まれ始めていたのです。今神様と、人の思いとが重なりました。

----- ヤコブの人間的な成長 -----

さて、43章全体をを読む時に、ひとつ気がついたことですが、それは今まで父の名がヤコブと呼ばれていたのに対して、ここでは、**父イスラエル**と呼ばれていることです。

ヤコブとは「押しのける者」の意味があります。改名して、イスラエルとなりました。

イスラエルとは「**神に勝たれる者**」の意味があります。

ヤコブはヤボクの渡し場で、神と格闘した時に、神様から「今後、お前の名はヤコブとは言わずイスラエルと呼びなさい。」と言われたのでした。

創世記32：28節「あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない、イスラエルだ。あなたが神と、また人と戦って、勝ったからだ。」しかし、聖書は今までは殆ど、イスラエルと言う名を用いなくて、ヤコブと言う名前を用いて来しました。それはまだイスラエルと言う呼ばれるに相応しくない所がたくさん彼の中にあったからでした。ところがこの43章では彼を何とイスラエルと呼んでいます。

実はヤコブは若い時には、兄や父を偽った狡猾な人物でした。しかし、長い苦勞を経て、神の前に従順を学びました。そして老年になってからは、神の意志に対しては断固として従う鍛えられた人物にされたのでした。ここに一人の人間の、信仰による成長の跡を見るのです。人は何歳になっても成長し続けなければなりません。

----- 行ったり、来たりして・・・ -----

でも成長しなければならないと言っても、そううまくはいきませんね。信じるとは、不信仰との戦いでもあります。素直に信じようとしても、そこにはいくつもの戦いがあります。いつも動揺があるのです。私たちは時にはヤコブであり、また時にはイスラエルになります。ヤコブとイスラエルの間を行ったり来たりしているのです。実はこれこそが私たちの姿なのではないでしょうか。でもいつも失敗し、許され、助けられながら、かろうじてイスラエルとしての生涯を全うして行くお互いなのです。

そして今ついに父イスラエルは、子供たちと一緒に、あれほど手放したくなかった愛するベニヤミンをエジプトに送るのでした。迷い、悩みながら、最後には主の御手にすべてをまかせベニヤミンを送りだしました。

15節「そこで、一行は贈り物を携え、二倍の銀を持ち、ベニヤミンを伴って出発した。そして、エジプトへ下り、ヨセフの前に立った。」

父ヤコブとその子ヨセフとの再会は確実に近づいています。

ピリピ2：13、14節「神はみこころのままに、あなたがたのうちに働いて志（こころざし）を立てさせ、事を行わせてくださる方です。すべてのことを、不平を言わずに、疑わずに行ないなさい。」

今週、皆さんはイスラエルとして人生を歩みますか。ヤコブとして歩みますか？
お祈りいたしましょう。